

●教材情報

CD-ROM教材・土佐漆喰

石と稲藁いなわらはこうして壁になる

四国ポリテクカレッジ 住居環境科 中脇 修身
(四国職業能力開発大学校)

1. はじめに

他県の漆喰は角叉など糊を混入する。土佐漆喰は、糊の代わりに稲藁のスサを混入する。スサは淡黄色の素朴な光や粘りをもたらす。さらに繊維は産毛のような状態で壁に残り絡み合う。土佐漆喰は癖の強い素材といわれ、工程間の最適なタイミングの見極めが難しい。判断を誤ると壁本来の価値を失う。本教材は、CD-ROMによる30分程度の作品である。静止画・文字・ムービー・ナレーションで構成し、土佐漆喰の製法から内部・外部の壁や妻壁つまかべの造形、塗り破風はふや水切瓦みずきりがわらの施工を解説したものである。

2. 勘の技法

白い壁といわれる土佐漆喰は、施工から半年1年をかけて土の色から白になる。その白は、厳密には純白ではなく、稲藁の非繊維部分のもつ淡黄色が溶け込んだ白である。土佐漆喰の施工は、同一現場においても温度や湿度の差により技法が異なる。季節や場所の違いから雨も風も、その日その時の癖もっているため、現場における作業は数値的表現が困難で、職人の勘によって判断されている。

3. 土佐漆喰のできるまで

- ①焼成 : 原石径10cm程度 温度1000度前後
- ②窯だし : 4日後取出 徳利状窯は高さ約7m
- ③放水 : 適度な放水 石は化学反応で粉末に
- ④スサの製造 : 発酵・切込→放水→立替
- ⑤ミキサー : 一度目から一昼夜放置・二度目へ

- ⑥袋詰め : ビニール袋詰め20kg

4. すさの発酵

スサは土佐漆喰の良否を決定づけるうえで重要な役目を持っている。3つの室で仕上げ、稲藁の切り込みから石灰との練合せ工程は、以下のようになる。

- ①室にスサを切り込む (第1の室)
- ②スサに放水を行う (第1の室)
- ③スサを踏みしめる (第1の室)
- ④テントで覆い発酵を促す (第1の室)
- ⑤立て替え (第1の室から第2の室へ)
- ⑥放水 (第2の室)
- ⑦テントで覆う (第2の室)
- ⑧立て替え (第3の室へ)
- ⑨スサの温度・湿度の度合いによって放水を行う
- ⑩地灰ちばいと練り合わす

5. 窯だし

窯での焼成期間は、取り出し口の開口調整で温度変化が可能である。窯だしの標準は4日としている。

取り出した石には放水を行う。化学反応によって発熱し湯気が立ち、表面から崩れていく。放水によって生石灰(きせっかい、またはせいせっかい)から消石灰に変わる。

6. 練り合わせ

原石は焼成後、水と反応させ粉末状態で1日ねかし、別の小屋に搬送する。

スサと練り合わす石灰は、練り場に搬送してから

さらに1ヵ月あまり寝かせる。早期に調合すると、団子状に固まるといわれる。3つ目の室からスサを取り出し石灰と混ぜ合わす。スサは茶褐色に発酵している。季節によって温度や湿度の管理が重要である。

乾燥が過ぎると発酵が不十分となり、湿度が過ぎると繊維が腐食する。配合のすべては、練り場を担当する職人の目分量で作業が進行する。一度目のミキサーに投入され、一応、土佐漆喰が整う。室は連続的に3つ、間口^{まぐち}2.7m奥行5.5mである。

7. 土佐漆喰の完成

再度ミキサーにかける。二度目のミキサーはラセン形のため漆喰としての純度が高くなる。ミキサーから取り出す漆喰は、ビニール袋に20kgで詰め込まれる。スサの非繊維部は溶け込み、繊維部は残る。

残った産毛のような繊維は、土佐漆喰の結合強度を高める。石と藁スサは、これまでの工程で完全に融合して、土佐漆喰が誕生する。

8. 木舞竹^{こまいだけ}

昔、施主たちは土壁の骨組み、木舞竹にもこだわりを持ち、季節を選び（10月ごろ）、闇夜の時期に伐採することで害虫の被害を防いだ。竹の直径45mm程度で6つ割といわれ、割の幅は20mm前後である。

現在現場では、輸入による竹が多くなってきた。

9. 壁土

土佐漆喰と土は施工面で水引の相性がよく、程度の高い仕上げが得られる。昔地方では、日本瓦の屋根下地や壁土は施主が準備した。それぞれの地域には仕様^{しやう}に適した土場があり、山の赤土^{あかつち}や田んぼの土を掘り出した。建築現場で土に水を溜めスサを切り込んで練り、期間をおいて再度スサを切り込み練った。1ヵ月～3ヵ月を要して壁土を造ったといわれる。住まい造りが大工職人から業者に移り始めたころ、土も同様に専門業者へと移行していった。

やがて施主から土やスサのこだわりが消え、詳細を知る人々が減少し、壁の主流は新建材へと移ってきたが、減少しながらも土壁を望む声は続いている。

10. 左官の手元^{てもと}

建築現場に湿式壁工法の多いころ、左官職人のほとんどは、専属の手元がいた。手元の援助が、技法リズムの連続性を維持し、鏝の『のり』を高め、仕上げ程度や能率を高めた。したがって腕達者な職人には、経験豊富な知恵のある手元がいて、影の支えとなっていたのである。こんにちのように仕事量が減少すると、職域からは『手元』の存在は不要となり消えていった。時々依頼のある壁^{かべせこう}施工に対しては、その現場にいるスタッフ（大工職人）で、その場限りの担当配置を行う。左官職人の手元とは、必要なものを必要な時に、必要な場所まで届ける人である。

11. 外部の施工

住宅における最近の施工工程は、荒壁に土を塗った後ラス板を打ち付け荒壁の間に空間をとる。

したがって、フェルト・メタルラス・モルタル塗りと新たな下地から2つ目の壁ができ、最後に土佐漆喰を仕上げる。

(1) モルタルの下地

施主によってはモルタル塗り後、次工程に1ヵ月以上の期間を求める。下地のラス板や構造材等がねじれ割れをおこした後、一定に落ち着いてから次の塗りを仕掛ける。土佐漆喰仕上げに木の変形による影響を少なくするためである。

- ・モルタル塗り 8～10mm
- ・配合 セメント 砂 1：3
- ・ほうき目をつける

次の工程まで1週間程度おく。左官職人は多くの現場を担当している。そのため一般的には2～3週間の期間をおくことが多い。

早い場合は3日で次の工程にとりかかる。色彩的な目安は、表面が乾燥して白くなったときである。

次の工程はハンダ^{ちゅう}（中ごみ）塗りである。モルタル塗りのあと、チリと称する下地を施工する。突出部は、ほぼ土佐漆喰の仕上面となる。

突出部の漆喰厚はゼロに近い。これは収縮による割れ防止の作業である。工程を詳細に区分すれば『チリ付け』の工程が加わる。

(2) 光る壁（鏡面仕上げ）

漆喰技法には基準はあつてないようなものともいう。厳密に同じことを求められてもできない。また、その必要もないのが技である。

技はその時々で変化させる。下地素材の種類、下地の乾燥程度、湿度や温度、風の強さ等……。

気象条件等がわずかに変化すると、鏝の走りや壁表面の表情が変わる。その時の条件にあった技を仕掛けることが、職人の腕前である。

土の下地は『水の引き』がよい。鏝のノリ（動き）や壁表面の押さえに好条件をもたらす。鏝の押さえ、磨きが始まると、土佐漆喰の壁面には、鏝や職人の顔が写ってくる。壁は同じ部分を、鏝や素手で数十回、時に100回ほど押さえる。しかも限られた時間の工程で行う。光ったり、鏡のように顔がうつることから、現場では『光る壁』とか『鏡面仕上げ』と呼ぶ。こうした仕上げは、手間を掛ければ完成するといったものではない。条件が整った時に限られる。また仕上げ表面には『手ごすり』という工程がある。鏝の代わりに手の平を使用する。『キュ

ー』という音を発しながら壁表面のくもりが取り除かれていく。さらに高級な仕上げの場合、キラ粉を布に包んで打ち付け手の平で磨く。いずれの工程も、適正な時期をとらえることが重要であり、現場経験から組み立てた勘の技が不可欠である。例えばキラ粉の使用においても、あとの拭き取るタイミングや技を熟知した者に許された工程といわれる。

12. おわりに

建築現場では湿式工法が減少している。調査によると工期が長いといわれているが、その空間に住む・暮らすという長期計画に、工期の数日間を待たないと問題にするほどの期間ではない。

また、本場である高知県安芸市では、押入から倉庫に土佐漆喰を使用している。土佐漆喰施工は単価の幅があり、庶民性の強い建材である。

自然や人間に優しい壁として、いま静かな人気を集めている。関係者はブームを待つのかつくるのか、職域の有り様を問われている。